

## コイル塊を利用してステント併用コイル塞栓が可能になった中大脳動脈瘤の一例

富尾亮介<sup>1)</sup> 植杉剛<sup>2)</sup> 赤路和則<sup>1)</sup>

1)公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経外科

2)公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳卒中部門

症例は 67 歳男性。左中大脳動脈瘤に対しコイル塞栓術予定となった。動脈瘤ネックが M2 superior trunk に騎乗していたため、ステント併用を予定した。8Fr Opimo を左内頸動脈に誘導後、Neuroform Atlas 展開用の XT-17 を M2 遠位に誘導試みるも、M1 から鋭角に M2 が分岐し困難だった。ダブルカテーテルテクニックに変更し、Eshelon14 と XT-17 から塞栓を行った。コイル 4 本で十分な塞栓を得られたが、コイル塊が M2 起始部を狭窄していたため、ステントによるギャッチアップを要した。再度 XT-17 を CHIKAI で M2 遠位へ誘導を試みると、コイル塊がサポートとなり容易に CHIKAI 及び XT-17 は M2 遠位へ進んだ。Neuroform Atlas を展開し、M2 の血流は改善し、手術終了となった。本症例のようにステント用マイクロカテーテルの遠位への誘導が難しい場合、先にコイルを充填することで遠位へのステント誘導を容易にする戦略が考えられる。